

いるかとくじら

——「欧米の生命観」批判——

宮 井 敏

昭和五三年二月二二日、長崎県杵岐郡勝本町漁業協同組合が勝本漁港沖合、辰の島入江で、近くの七里ヶ曾根のブリ・イカの漁場を荒らすいるか一千十一頭を撲殺によって処理した事のはしくも新聞・テレビで報道され、外電の報ずるところとなったために、アメリカ、イギリス、カナダの自然保護団体から一斉に非難をあげ、漁民の生活か自然保護かをめぐって、国の内外に多大の論議をまきおこす事となった。その後国際的規模の日本人非難は一たん影をひそめたかに見えたが、今年二月二十九日、ハワイ州高校教師デクスター・ロンドン・ケー

トが単独で同漁協設置の仕切り網を切断し、同所にいるか短期畜養場において捕獲中のいるか四百五十頭のうち二百五十頭を逃がしたため問題は再燃し、長崎県警杵岐署による器物損壊・威力業務妨害容疑の事情聴取に伴って、日本人の生命観が再び国際的な場において俎上にのせられる事となった。

その後、同人は長崎地検杵岐支部の略式起訴の勧告を拒否したため、三月八日長崎地検佐世保支部は威力業務妨害罪により逮捕、同十八日起訴されたが、五月三十日長崎地裁佐世保支部は検察側の主張を認め、杵岐漁民が

いるかを有害動物として捕獲・処理する事を正当の業務と見なし、求刑懲役八ヶ月に對して懲役六ヶ月、執行猶予三年の判決を言い渡した。

問題となった勝本漁協は組合員九百二十人、年間操業期間二百二十日で水揚げ二十億円、ここ十年來二月から四月にかけて約九十日間をいるかの大群に襲われ、一本釣りブリ漁に多大の被害を受けており、年間実損約十億円と推測されと言うが、いるかは宍岐沖で三万五千頭、九州沖全体で三十万頭棲息すると言われており、千頭のいるかでブリ、アジ、サバ、マグロ等一日約五万キロを捕食するものとして全宍岐漁民四千四百二十四人の十日分の漁獲量が消耗している事になると言う。

このため、一昨年より従来のあきらめムードを一擲して、積極的な追い込み戦術をとりはじめ、船団行動により前記辰の島入江に捕捉していたが、海面一帯が血の海になるなど、撲殺による屠殺方法が一見極めて凄惨な光景を呈して、それが雑誌のカラー・グラビアやテレビで

報じられて大反響を呼んだのにこりて、一基三千六百万円の破砕機を購入し、一時間十頭の割合で処理していたが、今回は二月二七日勝本町沖合のブリ漁場に現れた大群のうち約八百頭の追い込みに成功、三百五十頭を処理したが、未処理分四百五十頭のうち二百五十頭を前記自然保護運動家デクスター・ケイトにより逃がされ、これにより船団による追込み費用数百万円の損害のほか、害獣駆逐という正当な業務が妨害をうけた、とされたのである。

この、千隻以上の船団による追込み方式でも一日がかりで「むれ」の二、三パーセントが捕捉出来るにすぎず、日によって完全に失敗する事もあり、数日たつと再び数万頭が姿を見せると言うイタチごっこのくり返しであつたといわれる。また、追い込み、撲殺以外にも、「空砲をうつ」「模造シャチに録音したシャチの啼声を発振させる」等の方法も試みられたが、いずれも目立った効果はなく、「超音波による駆逐」方式も極めて有望

視されながら未だ実験段階であり、やむなく、さしたる成果もなく、また世論の非難をあびる事も承知の上で、上記「船団による追い込み、破砕」方式をつづけて来たものである。

これに対して、被告は「いるかは漁民の財産ではなく、自由に生きる動物であり、殺されかけている人間を助けるのと同じようにいるかを助けたのだ」と言い、「人間対動物の関係が根本的に問い直されるきわめて典型的なケースである」として終始無罪を主張したのである。また、アメリカにおける動物愛護団体や自然保護グループも、「残酷ないるか退治」に猛反発し、「賢くて愛くるしい」いるかに対する欧米人特有のセンチメントもあって、大使館、各地領事館に抗議が殺到し、各公館は数日間、個人、団体による抗議電話、直接の来訪に忙殺され、多数の電報、手紙の処理に大量の有様となった。イギリスでは事件報道後一ヶ月を経てもなお大使あての抗議が絶えず、天皇宛の電報も含めて一千通にのぼ

る抗議文が寄せられ、カナダ大使館でも一ヶ月足らずで八百五十通の抗議の手紙が殺到したと言う。

こうした一連の事件の仕掛け人であったデクスター・ロンドン・ケートはかつて世界最大の自然保護団体「グリーン・ピース・オブ・アース」のメンバーであったと言われるが、この財団は一九七〇年以来パンクパーに本部をおき、世界各地に支部を組織して環境破壊の動きにラディカルに反対して来た実績を持っており、ここ数年来国際捕鯨委員会（IWC）に対しても強力な圧力団体として捕鯨禁止を訴えつづけ、委員会内部の反捕鯨国グループに対して有形無形のサポートを行なってきたものである。

この委員会は一九四六年、「鯨資源の保存と増大、有効利用、及び捕鯨業の秩序ある発展」を目的として締結された国際捕鯨取締条約に基いて設けられたもので、日本は一九五一年に加盟しており、当時は日本、ソ連、ノルウェーなど有力捕鯨国が中心となり、くじらの乱獲防

止の取り決めの組織として機能していたものである。しかるに一九七二年、ストックホルムで国連人間環境会議がアメリカ提案の商業捕鯨十年間禁止の勧告案を決議して以来事態は一転、反捕鯨国の加盟が急増、捕鯨国は二四ヶ国中九ヶ国の少数派に転落し、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアを中心とする捕鯨絶対禁止グループが主導権を握る形となったのである。

今年度のIWC第三二回年次総会は七月二一日からイギリス・ブライトンで開催されたが、本来鯨資源の保護と適切な利用方法を検討する筈の会議が各国の反捕鯨団体や環境保護運動家（エンバイロメンタリスト）の強いプレッシャーのもとでの感情的な対立に終始し、アメリカ提案の捕鯨全面停止（モラトリアム）案を、「重要案件は本会議出席国四分の三以上の賛成で可決」という規定に救われて、辛うじて否決したが、沿岸マッコウ鯨の捕獲量割当ての如きは昨年の千三百五十頭から八百九十頭へと激減、割当てゼロまであと一步にまで追詰められ

る事となった。四四年当時、六船団四一隻のキャッチャー・ボート、一万一千人を擁した我が国の母船式捕鯨はいまだは一船団四隻のキャッチャー・ボート、二千三百人が南極海で細々と操業しているに過ぎない有様となっていたのである。

元々この捕獲量割当てと言うのは鯨資源の最適水準を定めた最大持続的生産量方式（MSY）によって算出されるもので、ナガス、シロナガス、セミ等はMSYレベル以下とされて一切の捕獲が禁止されており、我が国が認められているのは、イワシ、ミンク、マッコウ、ニタリの四種類だけとなっている。一九七五年、オーストラリアの提案によってIWCで決定されたこのMSYが現在世界公認の鯨資源管理方式となっているのであるが、IWCの下部組織である科学委員会の調査によっても、その後、ナガス、シロナガスで毎年四パーセントの増が確認されており、北太平洋のコクジラはMSYを遙かに上回る飽和状態、ミンクで一九三〇年代の倍増と報告さ

れている。しかるに、会議ではこうした科学的調査に基く鯨資源の適正利用がクールに討議される事が次第に少なくなり、年を追って反捕鯨国主導の感情的な議論が支配的となって来ているのである。

また、反捕鯨国一五ヶ国とは言い条、中にはスイスのような沿岸を持たない山国や、オーマンのような従来実績ゼロの国もあり、捕鯨国九ヶ国と言っても母船式捕鯨を行なっている日ソ両国を除けば、あとは零細な沿岸捕鯨国ばかりであり、結局、アメリカ、イギリスを主体とする反捕鯨国グループが捕鯨国間の分断をはかって日本を孤立させる戦術をとったり、科学的な資源論の立場から商業捕鯨全面禁止案に反対したカナダに対しては、「もはやカナダは環境保護国とは言えない」と激しく非難、これを重大な背信行為であるとしてIWC総会場でカナダ国旗を焼くなどして反捕鯨国間の締め付けをはかるなど、高度に政治的な動きが次第に露骨になって来ている。

反捕鯨運動の根拠が資源論である間はまだしも対応の仕様はあったのであるが、本年四月末大平前首相の訪米に合せてスミソニアンで開かれた「捕鯨の倫理」会議の如きは、「くじらは高等動物であり、これを捕殺するのは人間の倫理に反する」という立場をとり、「くじらの知性はチンパンジーより高く、人間より低い」という結論が甚だ根拠のあいまいなままに採択されている有様である。また、このIWCなる組織がそもそも問題で、年間三百万円程度の分担金を払えば通告のみで自由に加盟出来、その上総会の各国政府代表というのも極めてルーズな資格審査でみとめている。例えばセーシェル代表のシドニー・ホルトはイギリス人、ライオール・ワトソンはカナダ人であり、パナマ代表のフォートン・ゴウウィンはフランス人であるなど、代表中十名は別国籍の人間が委嘱をうけて代表となっているのである。また、会議の席上、前記グリーン・ピースや、フレンド・オブ・アリス、或はワールド・ワイルドライフ・基金など欧米十

七の自然保護団体がオブザーバーとして出席して度々議事を妨害するなど、国際規模の会議としての要件を明らかに欠いている面があり、会議場周辺でのデモ、ビラまき、いやがらせ、日本代表への暴行、議場への乱入等、果して公正な審議が保証されているのか、疑問とする向きも出て来るわけである。その上、戦後三五年、国際社会では常に多数派のリーダーであるアメリカの笠の下で行動して来た日本が今回はじめて少数派に属して戦わねばならず、国際外交で孤立した経験のない日本がとかく対立要因の多いソ連をパートナーとして行動しなければならぬ破目に陥っているのである。

しかも、ロンドンで国旗を焼かれたり、赤ペンキをかけられたり、人形が縛り首になったのは日本だけであって、日本より漁獲量の多いソ連ではなかったという事実はまことに注目値する。カナダ代表団のC・W・ニコル氏や、IWC事務局長キャンベル氏が卒直にみとめるように、日本に焦点を合せた反捕鯨キャンペーンの背景

には人種的偏見と経済的成功に対するしつと、つまりは形をかえた反日気運が根強く存在していると考えられるのである。

この点に関して言えば、日本は「科学的調査に基いた鯨資源の有効利用」という従来からの主張を辛抱強くPRして行くほかに道はないのであるが、今一つ日本側も強く反省しなければならぬ事に水産関係商社の抜けがけ商法があげられる。昨年七月十五日、IWC未加盟国であるポルトガル沖合で操業中のキプロス船籍の便宜置籍船シェラ号に、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアのエンバイロメンタリスト十七名が乗組んでいたシー・シェパード号が体当たりして捕鯨を阻止するという事件が起った。このシェラ号というのは海賊捕鯨船として知られる悪名高い密漁専門の船で、これに対して反捕鯨グループが実力行使に出たものであるが、問題はこのシェラ号から日本の水産業者が国内で高騰する鯨相場に目をつけて、ひそかに密漁鯨肉の輸入を行なってきた

疑いがかけられた事である。こうしたIWC未加盟国からの鯨肉買付けは五二年には七千三百トンであったものが、五三年には一万四百トンとなり、以来年々ふえ続けて来たものと想像されるが、IWCの資源保護の諸決議を尊重する旨確約している日本が違法行為による乱獲の果実をそのまま輸入している事は、シエラ号に数名の日本人が乗組んでいる事、及び実際上の船主は日本人ではないかと思われている事と相まって、反捕鯨国の心証を著しく損ねるものであり、理不尽な反捕鯨グループの行き過ぎを正当化しかねまじき行動であると言えよう。政府は直ちに非加盟国からの鯨肉輸入禁止の措置をとったが、時すでにおそく、日本捕鯨に対する不信感、ひいては日本人の生命観に対する憎しみはもはや恢復不能の点にまで高められたのである。

一方、いるかの場合でも、長崎県杵岐支庁水産課長がみとめるように、「漁場環境が悪くなったのか、漁業努力が魚を減らしたのか、それといるかによる食害との相

関関係がつかみにくい」という事もあり、前記五三年春のいわゆる「辰の島の虐殺」にしても、漁協があらかじめ報道陣に連絡済の上で追込み、撲殺、解体をやって見せる——つまり、日本人の残酷さへの国際的な非難の合唱をバネとして、これを国内的に利用して漁民に有利な環境、即ちいるか食害への政府補償を実現するためのデモンストレーションではなかったか、と言う疑問も出て来るわけである。そして、このメカニズムが諸外国の自然保護団体に露見してしまった以上、対日非難はますます増幅される事になり、日本側からすれば当然の反論が反論として通らなくなってしまうのである。

もともとアメリカが江戸時代に日本に開国を迫ったのは捕鯨船への薪水の補給のためであり、弘化三年（一八四六年）以降、大挙して日本沿岸に押寄せたアメリカ、帝政ロシア、オランダの近代装備を誇る母船式捕鯨の乱獲の為に、日本の沿岸式捕鯨業が減びてしまったと言う事実もある。旅行バトを絶滅させ、バイソンを減した

のはアメリカではなかったか、と言う反発である。

だが、それにもかかわらず、蛋白源として必要だからくじらを捕る、ブリを喰べるからいるかを殺す、と言う日本式の「経済の論理」ではもはや世界の大勢は通らなくなっているのも又嚴肅な事実であろう。アメリカが大量に牛を屠殺しているのではないかと言っても、それははじめから食用にと飼育した家畜のこと、野生動物は違う、と言われればそれまでのこと。アメリカの捕鯨船が日本沿岸のマッコウ、ナガス、セミを絶滅寸前まで乱獲したのではないかと言っても、それは昔のこと今は違う、と言われればそれまでである。つまり、現在最も先進的な野生動物保護の思想は、人間を取囲む自然環境の重要な一部である野生動物を、「経済の論理」ではなく「環境の論理」に基いて保存して行こうと言う考えに立つものであるから、「個別くじらの問題」、「個別いるかの問題」としてではなくて、トータルな、自然に対する人間のかかわり方の問題としてとらえて行かねばならないわ

けである。総論としての「自然保護」賛成、各論としての「いるか保護」、「くじら保護」反対、と言うのでは、やっぱり日本は自然破壊と公害の見本市だと言われても、それは仕方のない事なのではなからうか。

だがそれにもかかわらず、と再び言いたい。それにもかかわらず欧米人にとって、なぜいるかなのか、何故くじらなのかと言うことである。地球上の生きとし生けるものの命に対して、日本が従来よりもはるかにきびしい態度で接しなければならぬと言う主体的な自己批判に立った上で、なおわれわれは欧米人の海洋哺乳動物に対する偏愛とその押し付けを分析検討して、正すべくはこれを正さなければならない。けだし、情緒的な批判に感情的に反発しても何等生産性は期待出来ないからである。

さて、くじらというかはもともと哺乳動物として同じ「鯨目」という分類に属している。この「鯨目」が「ヒ

「ゲ鯨亜目」と「齒鯨亜目」に分かれ、セミ、ナガス、ザトウは前者に、マッコウ、ゴンドウ、及びいるかは後者に属している。従つて両者は時に混同される事もあつたようであるが、日本では従来から両者を水産物として魚なみに扱つて来たのに対して、欧米では近世の動物分類学をまつまでもなく、昔から人間に近い動物として考へて来たという根本的な違いがある。欧米の場合、人間を重視するならば人間に最も近い哺乳類も同様に保護さるべきだ、というロジックがある。とくにいるかの場合には「発達した脳による高い知能」をもつが故に一番人間に似た存在であると主張する。行動の多様性と脳の大きさ、構造などから推測してそのような考え方も出て来るのであらうが、解剖学的、生態学的になお信するに足る科学性に乏しく、一体、毛皮のためだけに集団撲殺されて肉は捨てられるアラスカのオットセイと較べてみて、いるかが特別視される程にも、そんなに違ふのかという疑問がなお残るわけである。

次は屠殺の方法の残酷さの問題がある。「あれ程にも可愛らしく賢い」いるかを海をくれないに染めてまで撲殺してよいのかと言う論法である。くじらの場合で言うならば鮫を打込んでから絶命するまでの時間の長さがあまりにもむごたらしいと言ふのである。しかしこれとても、アメリカのマグロの巻き網漁のように数千頭のいるかを溺死させるのと較べてどれ程の違いがあるかと言う事になり、単に人目につかず手際よく殺せばよいと言ふのではあまりに偽善的(6)なものであるであらう。一頭のいるかが愛すべき動物であるとしても、千頭のいるかは強大な破壊力となり、一万頭のいるかは一つの漁村をも滅ぼすものである事を銘記すべきである。

さらには又、歴史的、文化的な親近感の問題がある。昨年十月に刊行された藤原英司著「海からの使者、イルカ」は古代ギリシャの伝説にさかのぼる人間といるかの長いかかわりを詳しく紹介しており、ニュージーランドで政令で保護されていた二頭のいるかの話も愛情をこめ

てのべられている。くじらの場合は聖書である。新約マ

タイによる福音書十二章四十節が引用している予言者ヨナの受難は、もともと旧約ヨナ書一章の物語に基いているが、ギリシャ語の原典にある“*kétos*”は英語聖書の場合、*Authorized Version* の *Revised Standard Version* の *whale* と訳している。同じ様に、創世記一章二節のヘブル語の原典“*tannin*”が AV では“*great whale*”となっている。もっともこの訳には種々疑義があり、その後の翻訳は *New English Bible* の *Jerusalem Bible* とともに“*sea-monster*”或は“*great sea-monster*”となっているが、要するに初代教会の人々のイメージでは、海の大いなるものは大体「くじら」として理解されていたわけであり、その事が遙かに時代を隔てて一九世紀ニュートン・ランドの清教徒をして捕鯨に専念せしめた情熱の源であり、旧約のエイハブ、イシュマエルを借りて来て「白鯨」を追わしめたハーマン・メルヴィルの文化人類学的衝動であったと

言えよう。

こうした話は文化・宗教を異にする他民族にはたしかに理解の届かぬ面があり、誤解を生む基ともなるのであるが、このような歴史的背景が欧米人の海洋保護の感情的基礎になっているであらう事は充分に理解出来る。だが平和で賢く、可愛らしいから保護すると言うのであれば、では憎々しい、気味が悪いと言って爬虫類を絶滅してよいのかという反論が当然出て来るわけであり、趣味性の問題を他人に押付ける事の身勝手さがここに見事に浮彫りにされて来るのである。西欧合理主義と言われるものの意外な破綻としてのセンチメンタルな側面を見る思いがすることである。この地球上にはそれぞれ固有の風土から生れる生活習慣、価値観があり、その間の違いは「種類」のちがいであって、「程度」のちがいではないと言う事があらためて確認されなければならない。

さて、以上のような欧米人の動物一般に対する特有の

生命観と言うものは、本来自己の生存のために動物を殺して食用にしなければならない肉食人種固有の考え方から来ている。人間と動物の間に劃然たる一線を引いて人間を至上のものとし、それに奉仕する存在として動物を位置付ける発想である。モンスーン地帯と違って乾燥草原地帯では肉類が主食であり、そこには仏教で言う「殺生」という考え方は殆ど見られない。創世記の天地創造の記述に見られるように、すべてを神の与え給うたものとして受けとるのである。ただしそれは誤解してよく引用されるように、はじめから神が生きて動くものをすべて人の食料として簡単に与えたという事ではなく、同書一章二九節が示すように、はじめ神は「全地のおもてにある種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木」とを与えて、「これがあなたがたの食料になるであらう」とされたのである。このあと、アダムとエバはエデンの園を追われ（三章）、人の悪が地にはびこったのを見て神は人を造ったのを悔い（六章）、ノアに箱舟を作

らせて洪水をおこし（七章）、ノア六百一歳のとき水を引かせ、えらばれた箱舟の乗組みの人、けものをあらためて聖別して「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」と言われ、「すべて生きて動くものはあなたがたの食物となる」と定めたのである。

元来、動物の命を犠牲にして己の生命を維持せざるを得ない肉食人種の考え方と言うものは、その動物をめぐる争奪、及びそうした遊牧の生活の不安定さからのがれるための闘争を当然の事とする傾向があり、そこから他部族に対する征服と、被征服者に対する奴隸的支配を正当とする考えが生まれて来る。少数民族であり、従って被支配民族であったユダヤの人達が、地政学的に最悪の条件の中からこうした支配民族の「支配の倫理」に対して、逆に「自己犠牲の倫理」で対抗しつつ救世主を待ち望んだのはまことに必然の成りゆきであったと言える。この自己犠牲の代償としては来世での救いがあり、永遠のいのちが約束されるが、それは決してオートマチック

にすべての人類に与えられるものではなくて、み心に叶う、きびしく選ばれたる人々に対してのみ許される事であった。

その際、己の生命を維持するためにやむを得ず命を奪った動物に対しては潜在的な罪悪感があり、それに対する心理的補償現象として命を奪わずにすむ動物にはヒステリックなまでに過剰な愛情を注ぐ事になるのである。ヨーロッパに於て、家畜の大量屠殺とその食料化がおおよそ十二世紀頃から一般化して来たとすれば、愛玩動物飼育の習慣も又ほぼ軌を一にしてこの頃発生したものと想像されるのである。

また、選ばれたノアの一族と選ばれなかった人々の間には截然たる区別があつて些かの混同も許されない。白か黒か、敵か味方かと言うこの見事な割り切り方が、一神教特有の狭量さと相まって、極めて自己中心的な考え方を生む事になる。隣人愛をモットーとする宗教である以上、それが「エゴイスティック」であるとは決して言

えないわけであるが、その基本においてつよく「エゴセントリック」であると言う事である。マタイによる福音書二五章が示す羊と山羊の振り分けはまことに象徴的である。右にいる羊のむれの人々は父に祝福されて御国を受け継ぐが、左にいる山羊に当たる人々はのろわれたる者どもであり、悪魔とその使たちのために用意されている永遠の火の中に這入ってしまえと罵られるのである。

羊のむれが少数の被支配民族である間はただ相手を罵るだけで事済んだのであるが、ローマ帝国の国教となるに及んでキリスト教は体制の側に立つ事になり、帝国内の非キリスト教徒は差別されて法的にも無権利者と宣言される事になった。そして、強要された発展は国内から異教国へと拡がり、伝道と言う名の領土拡張戦争となり、山羊の群を抹殺したいという願望は、都合のよい力関係にある時はいつでもためらわず神の敵を絶滅しようとする強い決意と変つて行つたのである。具体的には「洗礼か死か」と言う十字軍イデオロギー⁽⁸⁾となり、異教徒はす

べてキリスト教徒の政治的、経済的、文化的支配に無条件に屈伏するか、懺滅されるかを選ばなければならなくなるのである。

問題が「敵対性矛盾」にある場合はまだよいとしよう。「味方内部の矛盾」が激しくなり、内ゲバ寸前となった時、いずれが正統でいずれが異端か、と解釈が分れた場合は、常に力関係で上位に立つ側が解釈権を独占する事になる。一五二〇年、ルターは「キリスト信者の自由」によって「心を罪や律法や戒律から自由に解放する」新しい精神についてのべ、さらに「平和の勧告」によって「民衆を耐え難いほどに圧迫する諸侯と領主は、神と人に対して深く罪を犯した事になる」と非難し、ローマ教会、ドイツ修道院に対して激しい批判をあげさせた。民衆はこれに触発されて、より現実的な階級的利害に目醒めて一五二四年ドイツ農民戦争を起すにいたる。御言葉の説きあかしに当たったルターは良心の責任のみならず、ドイツ国民一般に対する歴史的責任をも

当然とるべきにかかわらず、農民の決起を暴挙であるとして、逆上のあまり悪名高い「強盗・殺人的農民に対して」と題するパンフレットを発表して、「彼らは追剥や殺人者のように肉体と魂の二重の死に値」し、「すでに神の法と帝国の保護の外におかれた」以上、「反逆の徒を殺す事は正しくもあり、法にかなう」事であると断定し、「なしうるものは誰でも、ひそかにであろうと公であらうと、彼らを叩き殺し、絞め殺し、刺し殺す」べきであり、「暴徒ほど邪悪で悪魔的なものではなく、それは狂犬と同じように打ち殺さなければならない」と口を極めて罵ったのである。結果はこれに勢いを得た領主側の容赦ない殺戮であり、十万人の犠牲者であった。ひとたび靈魂を持たぬ悪魔であると極め付けられると反論も許されず、反抗も出来ず、ただ一方的な徹底したジェノサイドを甘受するほかはないという状況がここに見られるのである。

クロムウェルの場合もこれに酷似している。神に対す

る心からの献身を革命の大義とした聖者の行進が、一たびアイルランドへ向うと、突如殺戮と蛮行をほしきままにする人殺し集団に変貌してしまうのである。ダブリン北方ドローエダで数千人の命を奪ったあと、彼は記している。「これは野蛮な恥知らずどもへの神の正しい裁きである」と私は確信している」と。また、「神は予期しない摂理によって彼等アイリッシュに正しい裁きを与えたまい、かれらをしてわが兵士の餌食たらしめたもうた。多くの哀れなプロテスタントに加えられた残虐行為に、かれらはその血でもって償いをしたのである」と言っていて、かつて旧教徒によって新教徒に加えられた暴行に対する報復行為を正当化し、同じキリスト教徒に対する虐殺ですら神の導きであると言い張って恥じる所がないのである。イギリスにおいては自由と平等の戦士であったクロムウェルが一たび海外に出ると悪らつな帝国主義者として植民地を侵略し、原住民を虐殺し、しかも熱烈に神に祈ってそれを行ない、「本来ならば自責と悔恨の

気持ちで一ばいになるところだが、かかる行為にも十分な根拠があるのだ」と言うのである。¹⁰ どのような根拠か、今となつては知るべくもないが、今言いうる事は目的は手段を正当化しない、と言う事である。ましてその「目的」なるものが何等客観的な検証を経ない、きわめて主観的な解釈権の独占の下に掲げられたものである以上、なおさらと言う事になるう。

こうした、植民地に対する搾取と手を携えた福音伝道は一八四〇年のアヘン戦争をピークとして、侵略が開発途上国に対する経済援助に偽装されるまで続くが、植民地競争の終った後も、文化、経済、宗教等の諸価値を独善的に押付けるやり方は止む事なく続けられ、遂に現代に到って二人の使徒フランススを生んだ。フランス・スペルマン枢機卿はスペイン市民戦争ではフランコ政権を支持し、一九五〇年代にはマッカーシズムを弁護し、南ベトナム大統領ゴ・ディン・ディエム擁立に奔走し、ベトナム従軍司祭としては「ベトナム戦争は文明を

守る為の戦だ」と断言した人物である。フランス・コッポラは五四〇日の撮映日数と三千万ドルの製作費用を費して「地獄の黙示録」を作った映画監督である。スperlマンは勝利を確信して一段高い所から差別意識充分にアジア人に対した、いわば古典的な植民地派遣の宣教師タイプであり、コッポラは大義なき戦の結末としての虚脱、幻滅、倦怠の中からベトナムに黙示を求めた⁽¹²⁾。いわば現代的な悩めるアメリカ人のタイプである。天と地程に違う両者に通底するものはやはり米人特有の“geocentricity”であり、見下すにせよ、悩むにせよ、そこにはないものは「心からの他者への思いやり」と、「一たびは他者になり切って考える」という真の意味の自己犠牲であろうとおもわれる。

この状況はキリスト教の二大宗派が終始人権運動に対して批判的な態度をとり続けて来た事と無縁ではない。キリスト教にとっては「どんな宗教にも無関心で、どんな宗教をも差別せずに平等に取り扱う国家」と言うもの

はまさに「正義と理性に反する国家」であり、反教會的傾向の國家が規定する「人間および市民の權利」などと言うものは教會を無視した不当な要求であり、教會の代表する真理に背くものとされたのである。その上、この判断を補強する具体的事実として、ヨーロッパ大陸において最初の人権宣言を生み出したフランス革命がナポレオン支配へと墮落して行ったことが上げられる。自由と平等の人間宣言が人間否定の暴力に変質して行った事は、無拘束な抽象的自由が自己崩壊を遂げる必然的過程であり、神に対する自律精神の傲慢な反逆の必然的結果であると考えたのである。人権とはまさに權威に対抗する個人的公権として形成されたものである以上、その反權威の本質は、「神から与えられた威信と正当性」に基礎を置く教會的權威と相容れぬものであり、そこから生じるであろう「權利・義務のアンバランス」は神への帰属を義務とする教會的エートスと正面衝突する事になる⁽¹³⁾であろうからである。

しかしながら、全世界的規模で人権思想を考えてゆく場合、超宗教的、超国家的な普遍性が前提とされるのは当然の事であり、その事が徹底して理解されない限り、経済的、文化的力関係を背にした欧米人のあらゆる面における主観的善意の押し売りは止む事がないであろう。本多勝一はこれを、軍事的、宗教的、文化的、政治的、アメリカ的覇権主義と呼ぶ⁽¹⁴⁾。自分の国では一九七七年で二万七千頭、七九年で一万六千七百三十九頭のいるかを捕殺しながら、奄岐島までやって来ているかを逃がし、「数千年にわたってくじらを取って来たと言う歴史的背景と文化・食生活は尊重すべきだ」と言ってアラスカ・エスキモーの捕鯨は認めると要求しながら、数千年にわたってくじらを取って来た日本人の文化と食生活は認める気にならないと言う精神構造はまさに文化的覇権主義に外ならないと言えよう。

欧米のホエイリストやドルフィニストがこのようにあばれまくる背景にあるインサイド・ストーリーとしては

いろいろな事が言われている。六十年代に学生運動をやっていた連中が、食えない事もあってプロのエンバイロメンタリストになり、日本商品をボイコットしたい産業から、或は住民パワーの目をそらせたい巨大な公害産業から資金援助を受けている自然保護団体の専従員として、人種の偏見と経済的嫉妬の反日感情を巧みにあふりつつ、日本にターゲットを絞って攻撃し、また一方では動物愛護と言うセンチメンタルな大衆感情にも媚びているのが一連の事件の背景だとする見方もあるのである。

だが、それにもかかわらず、いるかとくじらと言う二つの海洋哺乳動物の保護をめぐる、はしなくも露呈した東西の生命観のちがいは世界の人権思想の大きな断層を端的に示すものとして、今後もおお多角的な検討・分析の必要がある事とおもわれる。

(1) 「漁場の敵イルカ模造シャチで追放」 「動物虐待の汚名返上へ、来月実験」 読売新聞、昭和五三年九月二八日付。

(2) 「超音波作戦効果てきめん、太地湾で発振器テスト、イルカ

逃げ回る、来年一月杓岐島で実用化」、朝日新聞、昭和五五年十一月二七日付。

(3) 「イルカ問題のルーツ、杓岐のイルカだけなぜ逃がす」渡辺昇一、週刊文春、昭和五五年五月一日付。「……シカゴの屠殺場に、テキサスの牧場に、牛を逃がしてやるために日本人が出かけるという事はやはり考えられない。ここでどうしても出て来るのは嫉妬心という事であろう。……日本の急速な進歩に欧米の方が嫉妬したのである。」

(4) 「日本代表が鯨保護団体の過激分子からチョコレート状の染料をかけられた事件が起きた翌日の十三日、会議にオブザーバーとして出ている鯨保護団体から過激派の行動を非難する文書が配られ、署名した団体数はなんと三十団体に達した」。朝日新聞、昭和五四年七月一五日付。「日本はクジラの敵ではない、小説で世界に訴えよう、カナダの作家ニコルさん」。「捕鯨小説を思い立ったのは、日本の捕鯨をフェアな目で見直したいというのが動機で、持論は『一定の捕獲制限さえすれば鯨類は減びない』と云うもので、クジラの乱獲規制を訴えるカナダのグリーン・ピース財団（本部バンクーバー）でこの持論を訴えたが相手にされず、脅迫状も舞込んだ」。夕刊読売新聞、昭和五三年十月十四日付。

(5) 「買いあさり日本人、野生動物の毛皮も、規制は望み薄、絶滅寸前も含む」、朝日新聞、昭和五五年十一月二七日付。

(6) 「動物保護と狩猟民、食って、着て、守ってどれも人間のエゴ」、「動物がニクくて殺しているんじゃない。生きるためには仕方ないじゃないか。オットセイをこん棒で叩きながらアリ

ニート人の一人はこう云ったと云う」、読売新聞、昭和五三年七月二三日付。

「スッポン料理、腕前見せ罰金、英国で日本料理調理師らに判決、熱湯でゆでるのは残酷」、「英国動物虐待防止協会（RSPCA）の係員二名が日本レストランを訪れ、身分を明さないままに調理を依頼し、……スッポンを熱湯に入れたのを見届けたあと、身分を明らかにし、裁判所に訴えたと告げた……」、朝日新聞、昭和五三年十一月八日付。

「スッポン調理騒動、日英動物観の違い、供養の心は同じ、自己の慣習で判断されたのでは……」、読売新聞、昭和五三年十一月一九日付。

「フェアブレイという言葉の発祥の地は怖らく英国なのだろうが、英国人がみなフェアだとは限らない。……身分を隠してやって来た同協会の係員が料理をしてみせると頼み……」、読売新聞「編集手帳」、昭和五三年十一月一九日付。

(7) 『海からの使者、イルカ』藤原英司著、朝日新聞社刊。

(8) ヨアヒム・カール著、高尾利数訳『キリスト教の悲慘』、りぶらりあ選書（法政大学出版局）の一、「異教徒に対する血腥い迫害」。

(9) 半田元夫、今野国夫著『キリスト教史Ⅱ』、世界宗教史叢書（山川出版社）、第二章、5「ドイツ農民戦争とルター」。

(10) 今井宏著『クロムウェル、ピューリタン革命の英雄』人と歴史シリーズ16（清水書院）、Ⅳ残虐行為、神の導きと報復行為、帝國主義者クロムウェル。

(11) 拙論「政治諷刺とアナキズム」『同志社大学人文学』（一九

六八年五月、六三ページ。

(12) 拙論「シンボジウム地獄の黙示録」(『月刊チャペルアワー』No.92、一九八〇、十月二〇日)一二ページ下段。

(13) W・フーバー、H・E・テート著、河島幸夫訳『人権の思想、法学的・哲学的・神学的考察』現代キリスト教倫理双書(新教出版社)、Ⅱ「神学と人権思想」4人権とキリスト教。

(14) 「動物保護、なげイルカなのか、ケイト被告と支援者の意見、知能が高く人間に近い、説得力ない特別視、日本にも環境で弱み」本多勝一編集委員、朝日新聞、昭和五五年五月二日付。

(15) 「エスキモー捕鯨に許可、国際委、米、譲歩案で説得」、「国際捕鯨委員会でクジラ保護国の先頭を切る米国がアラスカのエスキモーがクジラを取り続ける権利を通すため十三日夜、苦境に立たされた」。朝日新聞夕刊、昭和五四年七月十四日付。
なお、すべて事件の報道は朝日新聞朝夕刊記事によった。

追記

昭和五五年十月二三日、前記グリーン・ピースのメンバー、サンフランシスコ在住のバトリック・ウォールが静岡県伊東市の富津港で食用のかの追込み漁を妨害し、約百五十頭を逃がしたために本年一月二三日静岡県地検沼津支部は同人を威力業務妨害、器物損壊罪で起訴した。